

皮下腫瘍の超音波検査における血流評価についての検討

～皮膚科領域の診断別血流評価～

◎中島 佳那子¹⁾、糸川 沙耶¹⁾、井田 葉津季¹⁾、西村 はるか¹⁾、宇城 研悟¹⁾
松阪市民病院¹⁾

【はじめに】近年、表在領域における超音波検査は、皮下腫瘍の詳細な質的評価が可能なことから広く用いられるようになり、ドプラ法も重要な評価項目の一つである。今回、皮下腫瘍内の詳細な血流評価能の向上を目的に、当院皮膚科より依頼され表在超音波検査を行った皮下腫瘍の血流評価について retrospective に検討したので報告する。

【対象と方法】2016年10月から2023年9月までの6年間に当院で超音波検査を施行し、病理組織診断が確認できた皮下腫瘍283結節（男性134名、女性131名、計265名、平均年齢56.0歳）を対象とし、診断別に皮下腫瘍内の血流について検討した。方法は、低速流カラードプラ法を用いて撮像した画像に対して、Giovagnorio分類に基づいて、Ⅰ型（血流なし）、Ⅱ型（辺縁に一部血流）、Ⅲ型（辺縁に豊富な血流）、Ⅳ型（辺縁と内部に豊富な血流）の4つに分類した。

【結果】皮下腫瘍の内訳は、良性腫瘍269結節（表皮嚢腫、血管腫、石灰化上皮腫、脂肪腫、皮膚線維腫など）、悪性腫瘍14結節（転移性腫瘍、基底細胞癌、血管肉腫、平滑筋

肉腫、転移性リンパ節）であった。腫瘍内部の血流は、Ⅰ型が168結節、Ⅱ型は30結節、Ⅲ型は31結節、Ⅳ型は54結節であり、このうちⅠ、Ⅱ、Ⅲ型では表皮嚢腫が最も多く、Ⅳ型は石灰化上皮腫が最も多かった。悪性腫瘍はⅠ型で1結節、Ⅱ型で3結節、Ⅲ型で2結節、Ⅳ型で8結節であった。

【考察】皮下腫瘍における血流評価の報告は散見されるが、診断能に言及した報告は少ない。今回の検討で、良性腫瘍でも炎症性変化を伴う表皮嚢腫や初期～中期の石灰化上皮腫は血流信号が豊富な傾向にあった。超音波診断装置の性能向上により、以前に増してより血流信号が捉えやすくなっている。そのことを念頭に置いて我々も変化していく必要がある。

【まとめ】Bモードでの腫瘍の性状評価に加え、詳細な血流形態評価により、超音波検査の有用性がさらに高まる可能性がある。連絡先：0598-23-1515